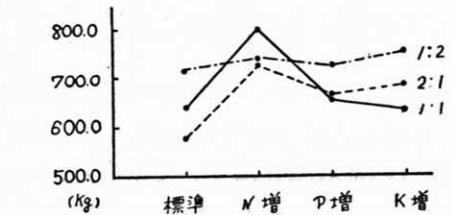


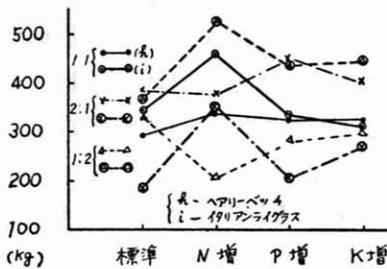
2. 結果及び考察

飼料作物の生育は年末・翌春ともに降水量が少く、生育は相当抑制された。

ライグラスの生育はN増肥ほど生草収量が多く、これに反して荳科草のベッチは、N増肥ほど減収の傾向が顕著に確認された。P・K増ではベッチに増収の傾向が認められ、ライグラスではK増にややその傾向がうかがわれる。



第2図 混播での乾物重比較(総量)



第3図 混播歩合及び施肥量によるベッチライグラスの収量の変化(乾物重)

混播割合については、荳科草1：禾草2の割合が全区を通じ優位を示している。混播の絶対収量を多くするには、ベッチ+ライグラスを1：2の割合とし、P・K増肥によって荳科草の増収を図るのが大筋として考えられる。

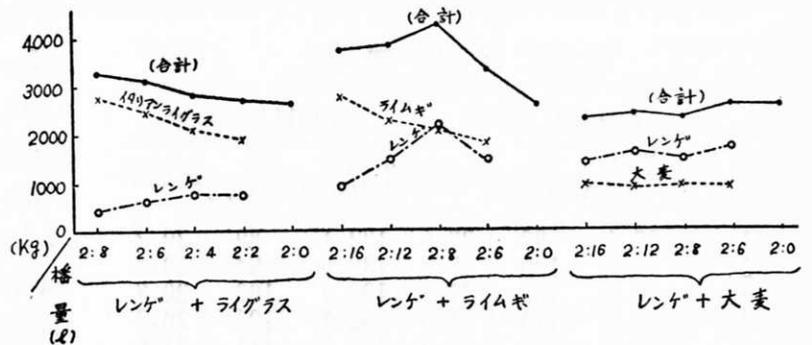
4. 不整地における混播栽培

不整地水田にレンゲ+禾草(ライグラス・ライムギ・大麦)の混播をおこない、生育収量を検討した。

1. 試験方法

第4図に示す試験構成で、1区10m²、2反覆、播種期はレンゲ9月5日・禾草は9月25日(レンゲは立毛間、禾草は刈取り直後散播圃場は前項試験と同様に本場第1圃場を使用した。

2. 結果及び考察



第4図 紫雲英に対する禾草混播の生草量比較

総体的に生草収量を検討すると、レンゲ+ライムギが収量が多く、他はやや劣った。一般にレンゲの収量減は禾草の増播による抑制のためと思われる。単播レンゲよりも混播区の全収量が優ることは前項試験結果と同じ傾向である。不整地水田裏作での組合せはレンゲ+ライムギが優り、播種量としては2ℓ：8ℓ位が飼料作物の生育競合も良いことが認められた。

青刈ライ麦に対する追肥及びジベレリン撒布効果

高橋 英一

(秋田県農試)

積雪期間の長い地域で春早くから生草を家畜に与えることは極めて有意義であって、このためジベレリンを撒布して刈取日を早められるかどうかを知るため試験を行ったので、その結果を報告する。

1. 試験方法

供試品種：ペトクザー、壟巾：180cm、播巾：160cm、播種量：a当り1080cc、播種期：昭和33年9月23日、施

肥量(基肥、各区共通 a 当りkg)：硫安1,875・過石2,625・塩加1,125・炭カル 11,250。追肥及びジベレリン施用日：3月31日。供試ジベレリンは武田ジベラ錠、濃度は50p.p.m.とし、a当り6ℓの割で葉面撒布した。

1区面積及び区制：1区15m²、3連制。試験区構成は第1表に示すとおりである。

2. 試験成績

第1表. 生育調査

番号	区名	発芽		葉色			草丈		4月16日	
		月日	良否	月日	月日	月日	月日	月日	主稈数	1株数
1	無追肥区	10.1	中	3	3	3	34	110	4.3	5.5
2	硫酸7kg追肥	"	"	3	3	3	36	113	4.3	4.9
3	" 14kg	"	"	3	4	3	36	118	4.5	4.5
4	" 21kg	"	"	3	4	4	35	118	4.6	5.8
5	尿素6kg	"	"	3	4	4	36	116	4.4	4.8
6	No.2+Gb撒布	"	"	2	2	2	56	118	4.4	5.5
7	No.5+Gb撒布	"	"	2	1	2	57	115	4.3	5.1
8	No.1+Gb撒布	"	"	2	1	2	58	117	4.4	5.4

注：葉色を表わす数値は濃緑を4とし、淡い程数値は小さい。

第2表. 収量調査

番号	4月16日刈取り			5月11日刈取り		
	a当り 生草重	同 No.3対比	風乾率	a当り 生草重	同 No.3対比	風乾率
1	87.4	92	27.6	172.1	89	20.2
2	94.9	100	27.5	182.0	94	20.7
3	95.0	100	27.5	193.9	100	20.7
4	107.6	113	24.0	202.7	105	20.3
5	109.8	116	26.0	215.7	111	21.6
6	132.8	140	21.2	196.0	102	21.5
7	115.5	122	20.1	149.2	77	22.1
8	117.4	124	22.5	148.6	77	23.1

3. 試験結果及び考察

1. 融雪後のN追肥及びGb, 撒布の効果を知るため秋季から均一に栽培したライ麦を材料として試験を実施した。その成績は第1・2表のとおりである。

2. 融雪後の3月31日に新葉の伸長が始まったので、無追肥区を除き所定の処理をした。

3. Gb撒布区は撒布3日目から葉色に変化がみられ、その後ますます淡くなって淡黄緑となった。その程度は追肥の少ないものが多いものより顕著であった。しかし草丈の伸長はGb撒布の各区とも極めて旺盛であった。

4. 4月16日草丈は30~40cmとなり、刈取りが容易に出来るようになったので1回目の刈取調査を行い、更に最高収量期とみられる穂孕期の5月11日に2回目の調査を行った。

5. まず4月16日の刈取調査についてみると。

(1) 追肥の有無にかかわらずGb撒布の止葉出葉が、無撒布に比べて5日程度早められた。

(2) 草丈では無追肥区がやや短かく、追肥区では量の多少にかかわらず大差がないが、Gb撒布区との間には顕著な差がみられ、Gb撒布区が63%も長かった。Gb撒布区間では大差がない。

(3) 最長茎生葉数及び1株茎数は各区とも差がみられなかった。

(4) 生草収量は無追肥が少く、Gb撒布区が15~30%の増収を示し、風乾率はGb撒布区群が無撒布区群より低い数値を示した。

6. 5月11日の調査の草丈は各区とも大差がなくなっており、生草収量では追肥区の方が多い収量をあげており、4月16日以降の増加率が多い。従ってGb撒布効果はこの期間に消滅したと考えられる。

以上からGb撒布によって刈取日を早めることは可能で、その早まり方は草丈40~50cmに達する日数からみると約10日と考えられ、撒布後1カ月も経過すればその効果は少くなる。

従って長期にわたって利用する場合には、約10日位刈取りする部分に撒布すれば実用であろうと思われるが、絶体収量をあげるためには従来のとおり追肥による方が効果的と考える。

水田裏作における青刈ライ麦簡易播種に関する試験

高橋 英 一

(秋田県農試)

水田裏作における青刈ライ麦の播種作業は稲の刈取り乾燥と労力競合をするので、整地及び播種作業は完全整

地播種から簡易整地播種に更に水稻立毛間不整地播種と省力化の方向に発展してきた。整地播種は栽培法として